

醫師ノ自ラ奴隸ノ有様ニ立テ至ルヲナキニアラス宜シシ之ヲ腦裡ニ明記シ完全ナル一
致團結ナナシ益々吾社會ヲシテ隆盛ナラシメ加之ナラス醫學會及醫會相併立シテ完備
ナル佳疆ニ進歩セシハ希望シテ止マサル所ナリ



地方性肝臟シストーマ

會員 飯森益太郎

此病ハ地方性ニ流行シ備前岡山等ニハ患者甚タ多シト雖モ未タ北陸地方ニ其流行アル
ヲ見聞セス余ハ當醫學部ニ於テ昨年四月ヨリ今日迄屍體解剖者二十四名中偶然三名ノ
患者ヲ發見セリ即チ一ハ肺結核ニ、一ハ大腿骨々瘍ニ、一ハ二尖辨膜不全閉鎖ニ合併セ
シ者ナリ之レヲ以テ考フレハ我々ハ日常之ヲ診スルヲ必ス少キヲ保セスト雖モ其症候
ノ現著ナラサルト之レニ注目スルニ冷淡ナルトヲ以テ恐ラクハ輕々看過セシ者亦僅少
ニアラサルヘシ

以上ノ三患者ハ河北郡及ヒ其近傍ノ農民ニソ嘗テ流行地ニ旅行滞在セシヲナキハ既往

ノ問診ニ因テ明カナリ之レヲ以テ見レハ河北郡ハ此病ノ流行地ナラン乎モ亦タ知ルヘカラス何トナレハ僅々二十四名屍体中己ニ三名ノ該患者ハ同郡ヨリ出セハナリ故ニ余ハ此症固有ノ解剖記事及ヒ生前ノ症候ヲ述ヘテ聊カ同臭諸君ノ參考ニ供セント欲ス

生前ノ症候

初期ニ於テハ自覺毫モ害セラレスト雖モ病漸ク進ムニ從テ食欲減損シ一日二三行ノ軟便ヲ利シ僅ニ身体ニ違常アルヲ感シ時々胃部及ヒ右季肋部ニ壓重ノ感アリ試ミ之レヲ壓スレハ鈍痛ヲ訴ヘ肝ノ濁音部増大シ右肋骨下緣ニ於テ容易ニ肥大セル肝臟ヲ觸知スルヲ得

發病后一乃至三年ニシテ病勢増進シ一日六乃至十一回ノ下痢アリテ身体漸ク羸瘦シ時トノ神思鬱憂シ皮膚ノ營養不頁トナリ顔面憔悴トシテ食欲全ク害セラレ下肢ニ水腫ヲ來シ一名ハ腹水遂ニ衰弱ト他ノ合併症トコ因テ鬼結ニ登レリ

(肝ノ解剖的及組織學的變化) 肝臟ハ一般ニ肥大シ表面滑澤コソ其質硬ク重量ハ千九百五十瓦乃至二千三百十瓦ヲ有シ横徑ハ二十八乃至三十一センチメートル直徑ハ二十乃至二十二センチメートルナルヲ算ス之レヲ切開スルニ肝管中數百條ノ二口虫ヲ含有ス

肝臟ヲ攝取シ「依的兒」發癆ニ由テ硬化シ「ミクロトーム」ヲ以テ數十ノ薄片ヲ製シ顯微鏡下ニ檢スルニ肝細胞ハ一般ニ混濁シ「ヘマトキシリン」ノ染色ニ由テ僅ニ其核ヲ發見スルヲ得且ツ葉間ノ結締織及ヒ胆道ハ甚シク肥厚ス試ミニ沃度丁幾硫酸ヲ注シモ其固有反應ヲ呈セス

(脾臟)ハ三名ノ患者共肥大セリト雖モ實質中變化ヲ認メス

(肺及腦)ニハ「ジストーム」ヲ見ス

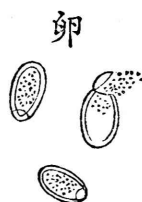
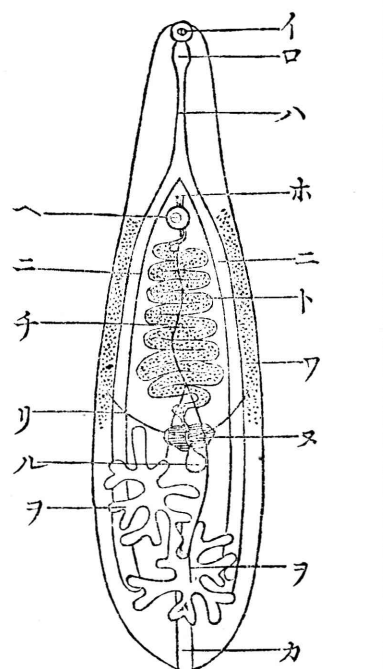
二口虫ノ剖檢

此虫ノ長徑ハ八乃至十二ミリメートル稀ニハ十七ミリメートルニシテ幅徑ハ二乃至三ミリメートルナルリ其形柳葉狀ニシテ前三分ノ一ハ狹小後三分ノ二ハ稍廣潤ナリ其境界部ノ下面ニ於テ腹吸盤アリ虫体ハ扁平ナリト雖モ腹側ハ少シク凸隆ス

此虫ノ前端ニハ口吸盤アリテ腹吸盤ヨリ少シク大ナリ

咽頭ハ橢圓形ニメ上ハ口吸盤ニ連リ下ハ食道ニ移行ス

食道ハ著シキ境界ナクシテ咽頭ヨリ始リ下端ハ腸ニ連リ腸ハ腹吸盤ノ前方ニ於テ食道ヨリ始リ体ノ左右ニ沿テ下リ後端ニ近キ所ニ於テ盲囊ニ終ル



イ 口 吸 盤
ロ 咽 頭
ハ 食 道
ホ 生 殖 門
ニ 腸
ト 腹 吸 盤
チ 子 宮
リ 輸 精 管
ル 卵 黃 管
フ 卵 黃 管
カ 排 泄 管

生殖門ハ腹吸盤ノ前方ニ位シ輸精管及ヒ子宮ノ開口スル處トナル
子宮ハ生殖門ニ始リ兩腸ヲ迂曲回轉シ無數ノ卵ヲ含有ス其終端ハ輸卵管ニ移行ス
輸精管ハ生殖門ヨリ始リ子宮ノ背側ヲ後方ニ向テ走リ二分シテ前後ノ墨丸中ニ入ル
卵黃巢ハ体ノ兩側ニ位シ黃卵管ノ媒介ニ由テ卵巢ニ開口ス

受精囊ハ卵巢ノ少シク後方ニ位シ「ラウレル」氏管ニ由テ罌丸ト連系ス

卵巢ハ子宮ノ後方ニ位シ輸卵管ト開通ス

罌丸ハ樹枝狀ニテ前後二箇アリテ輸精管ト連系ス

排泄孔ハ受精囊ノ近傍ヨリ回轉ヲ以テ始リ体ノ中央ヲ下行シ尾端ニ開口ス

新鮮ナル虫ハ半透明ニテ子宮ハ体ノ中央ニ黑色トナリ罌丸輸卵管卵巢ハ白色トナリテ現ル

(卵)ノ長徑ハ○、○二八密迷ニシテ卵圓形ナシ狹端ニ蓋ナ有シ殻内ニ顆粒狀ヲ有ス之レ子虫ナリ

(傳染ノ形況)此虫ハ卵ヨリ直接ニ傳染スルコトナキカ如シ何トナレハ此卵或ハ虫ヲ免或ハ犬等ノ食物ニ混シテ食セシムルモ常ニ陰性ノ結果ヲ呈スレハナリ故ニ此卵ハ一回魚腹ニ葬ラレ一定程度ニ發育シテ更ニ人身或ハ家畜動物中ニ侵入スルモノナラン

(流行地)吾人カ聞ク處ニ由レハ明治十一年初メテ備中ニ於テ之レヲ發見シ次テ備前岡山廣島近江等ニ地方性トナリテ流行スト云フ

